横芝の碑

昔の街道と物語りを伝える町原村の庚申様

（その九十四・上）

このシリーズ、その六十〝追分の昔を語る二基の碑〟として、町原の普門品十五万巻供養塔と、四国西国順礼回期供養記念の道標をご紹介しましたが、その近くに、この道標が示している、昔の入口と思われる角に、町原村と刻まれた、享保年間（一七一六～一七三六）に建立された庚申様が建っています。

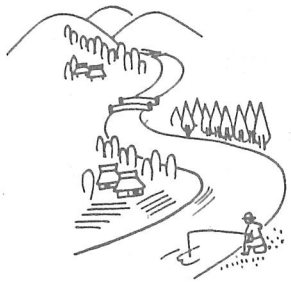
横芝町史の五九四頁に、木戸台、小堤、寺方、曾根合、於幾、坂田、取立、長倉、姥山、遠山、中台、牛熊、谷台の十三ヶ村と、坂田、寺方、於幾の入会地（坂田池）を合して、明治二十二年、大総村が設置された。とあります。

町原という地名は、横芝町の人人は勿論、他町村の人々もよく知っている地名だと思います。私も昔の村であったという、十三の地名の中には、町村合併後に、始めて覚えたものもありますが、町原の地名や場所は、合併の以前から知っていました。そして、これが木戸台の一部である、と聞かされて、其後、山武郡誌や、旧大総村についての文書等を見ましても、町原という地名が、表立って出ていることが、殆んどないことが分ってきましたので、何時か、木戸台の町原、という認識が定着してきました。それでも、順礼回期記念の道標に刻まれている「北、木戸台、多古、佐原道」というのを見た時「この道標の建っている場所が木戸台村の町原であるのならば、何故、北、木戸台本村等と刻まなかったのであろうか」と疑問を持ち始めていたのです。そんな時、享保年間に建てられたという庚申様に刻まれている、町原村という文字を見付けたのです。それは、少くとも、享保年間の頃は、町原が一つの村として存在していたことを物語るもので、何か大きな発見をしたように思えました。

庚申様の建っている場所は、振子坂を上り、順礼回期記念道標の手前を、道標から木戸台方面に入る道と、丁度鼎形に左に曲る。仮舗装の様に見える余り広くない道に向って、その角の所に建っています。庚申様は祠の中に祭られていて、青面（しょうめん）金剛が邪鬼を踏みつけて、足の下には三匹の猿が並んでいる、というよく見かける姿ですが、三匹の猿の中、両側の二匹は、外側を向いています。（大てい、三匹とも正面を向いているのですが、どうしてか、町原、於幾粟島境内、坂田等の庚申様の猿は正面を向いていません）そして、両側面には、奉待庚申構成就之所、享保八（一七二四）癸卯（みずのとう）十一月吉日、町原村、と刻んであります。庚申構成就の構という文字は、多分講中の講を、意味するものと思いますが、それが、当字であるのかどうかは分りません。

▲　側面に町原村と刻まれた町原の庚申様

順礼回期記念道等を取材した折に、地元の吉岡常二さん（元大総郵便局長）のご指導を頂いておりますが、その時、この庚申様の横を通りながら「大分荒れて終った小屋の手入れもしなくては……」等と言っておられたのを思い出しました。それに、吉岡さんからは折にふれては〝横芝の碑〟についての励ましのお信りや、ご連絡を頂いたりしておりますので、ご迷惑とは思いましたが、今度も失礼を顧みずに、ご指導を頂きに参上させて頂いたのです。

○写真は、町原の庚申様です。六十年位前には、毎年大晦日になると一日中お祭りをしていた。お札や縁起達磨等をこの祠の中に納めたのがいっぱいになり、外にまではみ出していた。子供らがそれを持ち出して底をくり抜き、頭にかぶったりして遊んだ、ということです。（本稿取材に当り、町原の吉岡常二さん、牛熊の土屋喜一さんのご協力とご指導を頂いています。尚、庚申様の場所は、周知の場所なので、案内図を割愛させて頂きました。）

町文化財審議会委員
小沢春光氏寄稿
（五五・七・三〇）